〔ウイルス　第58巻　第2号，pp.227-228，2008〕

トピックス

6. 湯河原キャンプ 2008 報告

小 柳　義 夫
京都大学ウイルス研究所

日本ウイルス学会による若手研究者研鑽のための湯河原キャンプは，今年も熱海市のウェルシティ湯河原にて，7月29日の午後から翌30日午前に，“合宿”として開催されました．このキャンプも5回目になります．本会は，学会将来構想委員会の発案によるもので，東京都神経科学総合研究所の小池智先生に第1回から事務局としてお世話していただいています．当日は，招待講演として，京都大学生命科学研究科の松田道行教授に「細胞内情報伝達系を生きた細胞，生きた動物で可視化する」，京都大学ウイルス研究所の五十嵐樹彦教授に「エイズ研究に於ける動物モデル-SHIVを中心として」，東京大学医科学研究所の俣野哲朗教授に「HIV/SIV複製に対する適応免疫反応の影響」というタイトルで各氏のシグナル分子の細胞生物学ならびに個体におけるウイルス感染事象の研究のお話を伺い，さらに，出席者によるたくさんの質問攻めがありました．通常の学会では時間制限のために，とても聞けないような詳しい内容について丁寧な説明があり，この話をきいてよかったと感想を若手からもききました．他に7人の大学院生も含めた若手研究者の一般演題（この発表ではその座長は前発表者という両方緊張を強いるものです）として，国立感染症研究所の鈴木亮介氏による「シュードウイルス粒子によるデングウイルスワクチン開発」，京都大学の深澤嘉伯氏による「弱毒生ワクチン株（Nef遺伝子欠損SHIV）免疫ザルに対する急性発症型SHIV攻撃接種後早期の全身臓器におけるウイルス動態」，北海道大学の鈴木忠樹氏による「Exit strategy of human polyomavirus from host cells」，九州大学の池亀聡氏による「宿主細胞の麻疹ウイルス感染認識機構と麻疹ウイルスVタンパク質の役割」，同大学の白銀勇太氏による「ハンマーヘッド型リボザイムを用いた新規ヒトメタニューモウイルス遺伝子操作系の確立」，筑波大学の若井ちとせ氏による「B型インフルエンザウイルスポリメラーゼの認識特異性の解析」，法政大学の三林正樹氏による「インフルエンザウイルス増殖を抑制する因子Ebp1の作用機序の解析」のそれぞれの発表が行われました．そして，若手参加者全員のポスター発表（フレッシュマンとフレッシュウーマンは自己紹介）が行われ，そのあとは深夜までの討論会という名目のサイエンスを肴にした酒宴がおこなわれました．このキャンプは，筑波大学の永田恭介先生の「ウイルス学の将来を担うのはお前らだ」という檄（ゲキ）をうけるのが習わしになっております．このキャンプに参加した以上は，これからみっちり勉強するのだと思ってもらうようにしたいと世話人は考えております．特に，発表に際し，この実験は「サイエンスの本質に関わるのか」という質問（湯河原的質問と呼んでいますが）がよく飛び交います．若手の方々はそれを怖がらずに向かっていきます．これが毎年のキャンプの光景です．さて，今年から，世話人もちょっと若返り，本キャンプによるますますの若手の活性化を期待しています．この会を“鍛え合う”場，ならびに，困難な実験の突破口や次のステップに向けた研究の進め方，新たな研究のヒントなどを見つける場として提供すべく，今後も続けていきたいと考えています．今回の参加者は44人でした．ウイルスに興味が少しでもある方もこれからの参加を期待しています．

連絡先
〒606-8507
京都大学ウイルス研究所ウイルス病態研究領域
TEL：075-751-4813
FAX：075-751-4812
E-mail：ykoyanag@virus.kyoto-u.ac.jp

〔ウイルス　第58巻　第2号，pp.227-228，2008〕